

御家人の北条氏被官化に関する一考察

— 渋谷氏を事例として — (要旨)

藤枝 明日香

鎌倉時代末期に成立した『沙汰未練書』は、鎌倉時代の人々が訴訟を起こすためのマニュアルであり、幕府の様々な役職・立場についての定義を述べている。御家人、御内人(被官)についてはそれぞれ、「一、外様者、將軍家奉公地頭御家人等事也」「一、御内方トハ、相模守殿御内奉公人事也」とある。つまり、御家人を外様と呼び、得宗すなわち北条氏の嫡流(ここでは相模守がそれにあたる)に仕える人を御内と呼ぶという明確な区分があったということがわかる。ところが、演習で扱った相模国を本貫とする御家人渋谷氏の史料『入来院文書』の中には、御家人である渋谷氏と、北条一門との密接な関係がうかがえる史料が存在している。私はこの史料に関心を持ち、御家人の被官化を卒業論文のテーマとして取り上げることにした。

論文では、御家人の被官化は、政権を掌握している北条氏の影響を受けていると考え、北条氏の動向をまとめながら、得宗専制体制の確立の過程を考察した。次に、実際の御家人被官化の事例として、一、鎌倉幕府成立時に、有力な御家人であった方が被官化の傾向が掴みやすいこと、二、史料が多く残っていること、この二点の理由から渋谷氏を選び、『入来院文書』『吾妻鏡』に見える渋谷氏の事項を検討し、被官化について考察していった。

結論として、第一に、史料の周辺から判断されるものとして、渋谷朝重が的始の際、射手として選ばれているが(『吾妻鏡』)、この時に一緒に選ばれている者は、先行研究により被官とされている者であることから、朝重自身も被官であると考えの方が自然であり、従って朝重の時代には被官化が始まっていたと考えられること、又この時期は北条氏の得宗専制体制の確立期と一致すること。第二に、史料から明確に判断されるものとして、建治三(一二七七)年「渋谷定仏書状案」「渋谷定仏置文」には、渋谷重員・頼重が得宗家から離れ、塩田(北条)義政につかえたと記載があり、徳治二(一三〇六)年「円覚寺毎月四日大斎結番」には、北条氏の私的な法要に渋谷氏が動員されていることから、渋谷氏は北条氏に仕えており、確かに被官化した御家人であると言えること。第三に、被官となった御家人は、御家人身分を剥奪されることはなく、鎌倉末期に存在した被官層の多くがこのような被官化御家人であり、被官から御家人になることは制度上許されないのに対し、御家人が被官化することとは何ら問題がなく、その存在は北条政権を支える存在であったこと。以上のことが考察できた。

今後の課題として、他氏の被官化の事例を渋谷氏のケースと比較することで、被官化の問題をより一層明らかにすることが出来るのではないかと考えている。

(全日空スカイホリデー株式会社)